九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ビュマン述「ジャン・ジャック・ルソー讃」

永田，英一

https://doi.org/10.15017/2332825

出版情報：文學研究. 61, pp.39-58, 1963-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ビュマン述「ジャン・ジャック・ルソー讃」

永田　英一

一七八九年のフランス大革命とルソーとの関係については、由来、諸家の間に多種多様の言説がなされている。中でもテーヌとルメートルのそれは反ルソーの呪咀としてよく知られている。けれどもこうした言説は要するに後世史家の恣意的な批判にすぎない。またこの革命の全過程を通じてルソーがいかに取扱われたかについても、われわれは多くの史実とエピソードを知っている。革命議会における頻繁なルソーの援用は別として、――〃人民の友〃マラーはパリの街頭で「社会契約論」をふりかざして人々の熱狂を煽った。ロベスピエールは、晩年散歩中のルソーを見てつよい印象をうけ、その後「ルソーへの献辞」を書いて、この「神人の尊い足跡」を追わんことを誓った。またルソーの遺骸は革命政府によってエルムノンヴィルの墓所からパンテオン廟へ移葬された。そしてその盛大な祭典には祖国ジュネーヴの代表団も幟*を立てて参加した。

＊この幟には「貴族的ジュネーヴはかれを追放したが、再生ジュネーヴはかれの名誉を回復した」と書かれていた。

けれども現実にこの「革命の悪霊」が当代の人々によってどう考えられていたか、――その証拠物件はないか。――できればその実物を入手したいというのが、私の滞仏中の念願の一つであった。そしてついに某友人の好意によって表題の一冊子*を所有することができた。これはまさしく私がジュネーヴのルソー博物館で陳列ケースのガラス越しに視線をひきつけられ、扉書をノートした文書の一つであって、バレール・ド・ヴィユーザックやマダム・ド・シャリエールのものとともにこの種の貴重な文献であると思われる。

＊ J.-N. Buman, *Éloge de J.-J. Rousseau*, Paris, an XII-(1803)

＊

ビュマンの「ルソー讃」は、扉書（写真参照）にもあるように、革命暦十二年ヴァンデミエール（葡萄月）二十日、ルソーの遺骸がパンテオンに移された記念の日に、「ルソー友の会」でなされた講演である。ルソーがこの聖堂に祀られたのは一七九四年

十月十一日（革命暦三年ヴァンデミエール二十日）であるから、この日――一八〇三年十月十一日は移葬九周年の記念日にあたる。

作者ビュマンとこの「ルソー友の会」については、こちらでは調査の手段がなかった。そこでパリの「ルソー協会」の幹事で「新しい人間・ジャン・ジャック・ルソー」[1]の著者マクシム・ネモ氏に訊ねたが、同氏の格別の努力にもかかわらず、実証的なものは何もえられなかった由。そこでさらにジュネーヴの「ルソー協会」に依頼したところ、同協会書記アンヌ・マリ・プフィステル嬢（Mlle Anne-Marie Pfister）から懇切な返書をよせられた。けれども同嬢のあらゆる書誌、目録、専門書についての「長い忍耐づよい調査」にもかかわらず、ジュネーヴからも左の報告をえたにすぎない。

「J・N・ビュマンはまったく神秘的な人物です。その名はどこにも見当りません。かれはこの「讃」のほかには何も書かなかったのでしょう。パリの国立図書館の「図書目録」にさえ載っていません。わたしが閲覧した書物のどれにも記されていません。

「ルソー友の会」については、これはイザベル・ブールダン女史の「フランス革命中のパリの民間団体」[2]についての著書にも記されていませんので、大して重要な会ではなかったのでしょう。あるいはこの「ルソー友の会」は一七九二年以後に、つまりブールダン女史の研究した時代以後に設立されたものでしょう。ただモリース・ツールヌー著「革命時代のパリ史書誌」[3]の中につぎの出版物が記載されていますので、お知らせ致します。――

"Vive la République. Liberté ! Egalité ! La Société des Amis de Jean-Jacques Rousseau, séante rue de la Huchette, n° 36, à ses frères et amis, salut et fraternité."

Impr. R.-F. Lebois. Sans date. In-folio plano.

Cote de la Bibliothèque nationale de Paris: Lb41 5002.

なお、この「ルソー讃」に附された銘句（扉書。本文四二ページにも引用されている）についても、未詳、おそらく革命時代の弁論家の言であろう」と同嬢はいっている。

1) Maxime Nemo, *l'Homme Nouveau: Jean-Jacques Rousseau*, Paris, 1957.

2) Isabelle Bourdin, *les sociétés populaires de Paris pendant la R volution fran aise.*

3) Maurice Tourneux, *la Bibliographie de l'histoire de Paris pendant la Révolution*, t. II, n° 9685.

ところで、八九年のフランス革命の終局をどこに劃するかについては諸説がある。ある人は一七九四年の「テルミドール反動」[1]を、またある人は一七九九年の「ブリュメール十八日」[2]のクーデターを、さらにある人は一八〇四年のナポレオン帝政の成立をも

ÉLOGE

DE J.-J. ROUSSEAU.

DISCOURS

Prononcé à la Société des Amis de ce grand Homme, le 20 Vendemiaire, jour anniversaire de la translation de ses cendres au Panthéon.

PAR J.-N. BUMAN.

« Heureux le pays où l'on ne trouverait ni un seul champ, ni un seul esprit incultes ! »

A PARIS,

Chez { P. MONGIES, Libraire, cour des Fontaines, n°. 1, et palais du Tribunat, n°. 224 ;
LEMAIRE, Imprimeur du Journal *Le Citoyen Français*, rue d'Enfer, n°. 31.

AN XII. — (1803).

ってその劃期としている。いづれにせよ。この講演のなされた一八〇三年には、まだ大革命の社会的痙攣は持続し、血なまぐさいドラマの記憶も生々しく、人々は異常な雰囲気の中に生きていた。しかも、ボナパルトの出現によってフランス国民のエネルギーは急速に膨脹し、すでに全ヨーロッパに爆発していたのである。――われわれはこうした特異な時代環境と心理状態にあって〃自然と真実の人〃ルソーが、この人を愛する人々の集会で、どのように語られたかを知るために、この「ルソー讃」の全文を紹介しよう。

1) 一七九四年七月二十七日（革命暦二年テルミドール（熱月）九日）、ロベスピエールが失脚して恐怖政治が終った。

2) 一七九九年十一月九日（革命暦七年ブリュメール（霧月十八日）、ボナパルトがこのクーデターによって軍事独裁権を握った。

*

ジャン・ジャック・ルソーの霊に捧ぐ

おお、ルソーよ！ 真理のためにもろもろの侮辱と迫害に耐えた偉人には、あまりにふさわしからぬこの敬意をうけ給え。汝の遺骸が安らかに眠るように！ 汝の名誉は正義と感謝にみちたすべての人々の胸の中に永遠に讃えられるであろう。

ジャン・ジャック・ルソー讃

市民諸君

諸君は、ルソーの名誉を讃えるために定められたこの日に、かれの墓の上に花を供えようとしている。私は諸君の意見の代弁者として、その天才と労作によって全ヨーロッパに名をはせた、不滅の人にたいする公衆の感謝の念を諸君とともにわかつものである。

市民諸君、諸君も知っているように、今日かれは人類の恩人の一人として認められている。かれの才能、天性、かれの道徳、節義がかれにこの資格を獲得させたのだ。かれの名誉のために建てられた像、フランス人民がかれの遺骸をもっとも栄誉ある記念建造物の中に納めて、かれにささげたパンテオンの礼式、統領回廊における偉大な人々の中に数えられ、元老院の会議室の中に置かれたかれの胸像、これらはルソーのために国民的感謝と同じくかれが雄弁と精力をもってその権利を宣言した諸国民の感謝の、永遠の誓いを保証する記念物である。

この偉大な人間に関するものは、すべて人類にかかわるものだ。かれはその世紀と祖国をかれの明智と節義の範によって啓発し、そして均しくこれらに名誉をあたえたのだ。かれは不正と偏見を理性の法廷に召喚して、その法によって裁かせた。この法廷において、かれは被圧迫者の勇敢な弁護人であった。かれはその天才と雄弁によって、暴政にたいする諸国民の権利とともに、自然の権利を主張した。「正義と真実、とかれはいう。これが人間の第一の義務だ。人類と祖国、これが人間の第一の愛情だ。特殊な配慮がこの順序を変えさせる時、とかれはつけ加える。人間は

つねに有罪なのだ。*」

＊「ダランベールへの書簡」の序文。

ある批評家のいうように、ルソーは徳 *Vertu* という厳めしい言葉の感じを鼓吹したというより、むしろこれを念入りな誇張によってしばしば繰返したといって、われわれは他の多くの人々のように非難することはできない。かれがわれわれの義務、われわれの幸福に不可欠な原理、また人間が自己自身にいだき、かつその同胞にはらうべき尊敬について語る時、それは真情からのみ発しうるところの豊富さと魅力と迫力をもってである。

いかなる作家も、人間の心をより真近に観察し、また女性の性格や母親の義務をよりよく描いたものはない。有名なビュフォンは、ルソー以前に、母親はみづから子供を育てなければならぬと唱え、そしてそれを証明したといって指摘されたが、「なるほど、と博学な自然学者は答えた。われわれは皆そのことをいった。しかしルソーだけがそれを命令し、そして服従させる。」

またかれは母親に嬰児をあまり窮屈な、締めつけた産着の中にくるんではならぬと教えて、同じくこれを守らせた。それは嬰児の呼吸をさまたげ、身体を変形させ、健康に必要な運動を奪ってしまう。この有害な習慣は、誤謬の諸世紀を通して伝達され、今日まで浸透してきたのである。

ルソーはまたわれわれに、善良な市民を形成し、そしてその義務をりっぱに果す能力をあたえるための公教育の重要性を十分に知らせた。「公の問題において、とかれはいった。わたしの声がいかに微力であろうとも、これについて発言する権利は、これらの問題を知る義務をわたしに課するに十分である。*」

＊「社会契約論」第一部。

十八世紀は博学の世紀をもってみづから任じていた。そしてその世紀の、これがもっとも博学な人物の一人であったことにわれわれは注意しよう。

この偉人のいったように、学問の乱用は道徳に有害であったが、無智が諸国民を苦しめるもっとも大きな禍の一つであることも自明である。実際、無智は社会的災害のもっとも多産な根源であって、われわれは、その明識と祖国愛によって秀でたある作家とともに、次のようにいうことを躊躇しないであろう。

〃未開発のただ一枚の田畑も、ただ一個の精神も見られぬ
国こそ幸いなれ！〃

国民の無智が暴君にのみ有益であることを知らぬものがあろうか。無智は単に善をおこなうに必要な智識を禁じることによって、それ自身不利であるばかりか、さらにみづから知らぬことを知っていると信じる点において、しばしば危険である。「無智ほど決定的なものは何もない、とルソーはいう。そして懐疑は大衆の間には極めて稀なものだ、真の哲学者において断定がそうであるように。」

ルソーが人間の心と政治支配の学についてなした研究は、そのあらゆる弊害をかれを知らしめたのであった。深遠なモラリスト、同じく深遠な政治家であるルソーに、君主政治の退廃を予見

させたのは、ほかならぬフランスにおけるその悪弊であった。そしてかれは革命の第一の先駆者であった。かれはその到来の三十年以上も前にこれを予言した。後世はその証拠をかれの著作の中に見出すであろう。われわれはその文章を忠実に引写して、聴衆の注意に供しよう。

「諸君は社会の現在の秩序を信じているが、とルソーはいった。しかし諸君はこの秩序が必然的に革命をまぬがれぬものであり、しかも諸君の子弟の身にかかわる変革を予見することも、予防することも不可能だということを考えても見ないのだ。大官は小吏となり、富者は貧者となり、君主は臣下となるのだ。だから運命の打撃は諸君がそれをまぬがれうると考えるほど稀なものであろうか。われわれは危機の状態と革命の世紀に近づいている、とかれはつづける。その時われわれがどうなるかを、誰がわれわれに保証しえよう。人間が作ったすべてのものを、人間が破壊するかも知れないのだ。自然が押す極印のほかに消しがたいものは何もない。そして自然は君主も富者も大名も作らないのだ。されば諸君が権勢のためにのみ育てた太守は、下濺にあってどうするか。黄金によってしか生きる術を知らぬ収税人は、貧困にあって何をするか。自分自身を用いる術を知らず、自己の外なるものの中にのみ自分の存在を投入する、あの仰々しい馬鹿者は、すべてを剝奪されて、どうするだろう。その時おのれを捨てる身分を捨て、運命を無視して人間で留まるものこそ幸いなるかなだ！ 自分の王座の残骸の下に狂気のごとくわが身を埋めようとする、あの敗戦の王者を、あらんかぎり讃えるがよい。このわたしは、かれを軽蔑する。かれは王冠によってのみ存在し、王者でなければ、まったく無にひとしいことをわたしは見るからだ。しかし王冠を失っても、それなしで過せる人は、その時、王冠の上にある。卑怯者でも、悪人でも、狂人でも、人並にみたしうる王者の位から、その人は滅多に人のみたしえない人間の身分に上るのだ。そうして、この人は運命に打勝ち、運命を物ともしない。自分一人のほかには何ものも負っていないのだ。そして、もはや自分以外に示すもののない時、この人は決して無ではない。何ものかだ。そうだ、わたしは、君臨しなければ、自分がどうなるかも知らぬ哀れなタルクィニウス[1]よりも、また三つの王国の所有者の相続人[2]でありながら、自分の不幸につけこむすべての人の玩具となり、宮廷から宮廷へさまよい歩き、到るところに救援をもとめて到るところに侮辱を見出し、もはや自己の手中にない職業のほかに何ものもなしえない男よりも、コリントで学舎の教師になったシュラクサイの王[3]や、ローマで書記になったマケドニアの王[4]の方を百倍も愛する。*」

1) タルクィニウス傲慢王（Tarquinius Superbus, Tarquin le Superbe）ローマ最後の王。

2) 小僭称者チャールズ・エドワード（Charles Edward）英国王ジェイムズ二世の孫。

3) ディオニュシオス二世（Dionysios II, Denys le

Jeune）シュラクサイの僭主。

4）マケドニアの王ペルセウスの子アレクサンドロス。

＊「エミール」巻三。

何という描写であろう、市民諸君！　そしてルソーの雄渾な筆から出た、何とすばらしい教訓であろう！　われわれはこの文章の中に、何という真実、何という判断の深さを見ることであろう！　またわれわれは次の文章に、この偉大な人が政治に劣らず道徳においても深遠であったことを見るであろう。

「幼年時代に適当する唯一の道徳の教えは、とかれはいう。そして老若を問わずもっとも重要なものは、何人にも決して悪をなさないことだ。善をなすべしという掟そのものも、この教えに依存するのでなければ、危険、虚偽、不条理である。誰が善をなさないか。すべての人が善をなす、悪人も他の人々と同様に。悪人は百人の不幸者を犠牲にして一人の幸福者をつくる。そしてそこからわれわれの災禍が生じるのだ。もっとも崇高な徳はネガティヴだ。同時にもっとも困難なものだ。というのは、それは何の衒いもなく、またいま一人の人間をわれわれに満足させて送りかえすという、あの人間の心に快い愉悦を超越しているからだ。おお！　自分の同胞に、とルソーは叫ぶ。絶対に悪をなさない人が、もしあるならば、その人は必然的に何という善をなすことであろう！　そのためにこの人は何という精神の不屈さ、性格の強さを必要とするであろう！　これをやり遂げることがいかに困難であるかを理解するのは、この問題について論議するのでなく、これを実践しようと努力することによってである。」

〃己の欲せざる所、これを人に施さず。〃　この正義によって定められた戒律を、誰がルソーよりもよく論述したであろうか。この論述によって誰がかれよりもよくこれを説得的ならしめたであろうか。幼年時代にこれを教え、そして老若を問わず、すべての人々にしばしば繰返すことは、いかに肝要なことであろう！　人間の幸福と人類の名誉をつくるためには、この戒律が守られさえすればいいのである。

ルソーを雄弁家として見るならば、われわれはつねにかれの中に天才人を、力と熱と想像力と霊感にみちた深遠な人間を見出すであろう。かれは自己の天才をあらゆるスタイルに順応させる術を知っていた。諧調、律動、そしてかれの文章全体の調和は、雄弁術における美質のモデルである。かれは自己の思想を、あの文章の魅力あるいは魔術をうむ精神の明敏、感情の繊細、美妙な感受性をもって表現した。そしてそれは書巻を措くあたわしめず、喜んでふたたび取らせるところの魔法のスタイルであり、かつて二人のジェズィットをしてかれにその雄弁の秘訣を問わせたものだ。「神父方よ、とルソーはいった。実際わたしは秘訣を一つもっている。だがこれはあなた方の社会には通用しない。それは決して自分の考えることしかいわないことだ。」

かれの「教育論」は、若干の点では実行不可能なものだが、すぐれた原理にみちている。それはこの重要な問題に公衆の注意を

うまく喚起した。エルヴェシウスは、ルソーが生徒に所有権を尊重し、真人たることを教える、その方法だけでも立像に値したと信じていた。

精神を古代人の読書で培われたルソーは、古代作家に精通していた。かれは随時随所に的確な引用をして、古代人に、その美徳あるいは悪徳において、正しい評価をあたえた。かれは特にギリシアとイタリアの古代の民衆を、その自由への愛の故に称讃した。ああ、もしかれが、フランス人民の数々の勝利に驚嘆するヨーロッパを見たならば、何といったであろう！ フランス人民は自己の自由と他の諸国民の自由のために闘い、ついに、自己の勇気と明智によってフランス軍の上にかくも多くの名誉をもたらしたこの苦しい戦闘から、堂々とぬけ出るのである。

哲学者として、ルソーは善人を愛したほどに悪人を憎んでいた。かれの善徳はかれにふさわしい友人をあたえた。すなわち身分と個人的価値によって秀でた人々である。（リュクサンブール元帥、マルゼルブ長官など。）かれはまたすべての偉大な人々がもったように、敵をもった。かれの卓越した才能が羨望と嫉妬ぶかい競争心をよびさまし、これにつきまとわれ、中傷されたのである。かれが筆をとったのは、すでに四十歳に近かった。この時、かれは博学多識の一つの論文によって文学生活をはじめたのだが、その論文こそヨーロッパにいま一人の偉人を告知したのである。

ディジョンのアカデミーは懸賞課題として次の問題を提示したのであった。——

〃学問芸術の復興は道徳を純化するのに貢献したかどうか。〃*

* *Si le rétablissement des Sciences et des Arts a contribué à purer les moeurs ?*

ルソーはこの問題を検討した。かれの心は感動し、眼は涙にぬれた。そしてかれは学問が道徳に有益であったよりもはるかに有害であったことを世界に宣言した。

「しかし、もしルソーが、とわれわれの代表者の一人（ブリオ Briot）はいう。その弊害を取除いた学問を考察したならば、かれは学問にもっとも輝しい名誉をあたえたであろう。そして世界を照らし、諸国民を教育することをこれに要求したであろう。この哲学者が人類に貢献した人々の中でも第一級に列せられたのは学問によってである。そして人間万事かくの如しという事実からこの雄弁家は結論する。もっとも賢明なものはつねに弊害をともなうものだと。そしてこの弊害の抑制にこそ立法者は不断に志向しなければならないとつけ加える。」

ルソーは賛否両論をひきおこす問題を取扱ったのであった。かれの論文はアカデミーの賞をうけ、たちまち一群の反対者に攻撃された。若干の批評家は礼儀を忘れることなくかれの見解を反駁し、かれの才智と才能を賞揚したが、こうした節度の範は必ずしもかれの攻撃者たちによって従われなかった。

またファナティスムはその刃を研ぎ、ルソーの敵の数はかれの名声とともに増加した。かれの誠実と率直さは、仮面をはがれる

ことを恐れる悪徳偽善の人々を憤激させた。かれらはこの哲学者の声価と感じやすい魂を打ちくだくために卑怯下劣な手段に訴えた。軽蔑すべき敵どものうちの若干のものは、盲目的な情念にかられて、道理がなければ、罵詈雑言によってかれを攻撃し、みづから名をなそうと欲した。こうしたある機会に、ルソーは友人の一人にこう書き送った。「もしそれに応えることを辞さなかったならば、わたしはわたし自身かれらの罵詈雑言に値すると思うでしょう。」大賢の一言だ。以って教訓とすべきであろう。罵詈雑言はこれを発するものたちにのみ損害をあたえるということをかれは確信していたのだ。ルソーはしばしばその克己をもってかれらに対抗するのみであった。それはいくたびか敵どもの迫害を耐えるに役立った徳であり、またかれをしてこういわしめたものだ。「今後はもうかれらを救さなければならない、かれらに似ないために。」

高名なこの人と同時代の人々は、かれが同時にその逆境、迫害者、また肉体的ならびに精神的苦痛とたたかい、しかも同胞のために有用であろうとする欲求に悩まされるのを見た。かれは同胞を幸福にするための手段をもとめ、みづからの明智でかれらを啓発し、そしてかれらが犯した学問の乱用を指摘した。われわれはかれの精進と徹夜のおかげで次の諸作をもっている。かれが作詞作曲したオペラ「村の卜者」、「経済論」、「エミールまたは教育論」、「新エロイーズ」、「社会契約論」、「英雄の徳についての論」、その他、人類と正義と秩序への愛にみちた多くの著作である。

市民諸君、われわれはしばしこの「英雄の徳についての論」*に立ち留まろう。諸君はそこにわれわれの尊敬する哲学者の男性的な、堅固な筆致を見出すであろう。

* *Discours sur les vertus des Héros*, 正確には— *Discours sur cette question proposée en 1751 par l'Académie de Corse : Quelle est la vertu la plus nécessaire aux héros, et quels sont les héros à qui cette vertu a manqué ?*

賢者と英雄を比較した後、ルソーはわれわれにいう。

「賢者の性格にはより多くの完成があり、英雄のそれにはより多くの豪華さがある。そしてこのように両者をそれ自身において考察することに満足するならば、前者が優先的に選ばれるであろう。しかし社会の利害との関連において考察するならば、やがて新たな反省がまた別な意見をうみ、英雄の資質に然るべき優位をあたえるであろう。それはあらゆる世紀に満場一致で認められたものである。

自己の幸福への配慮が賢者のすべての関心である。そしてそれは疑いもなく一個の平凡人の努力をみたすに十分である。真の英雄の眼力はさらに遠くに及ぶ。人類の幸福がその目標なのだ。そして英雄が天からうけた偉大な精神をささげるのは、この崇高な仕事にたいしてである。

哲学者は世界に有益な指示をあたえることができる。だがその教訓は、これを軽蔑する大官貴族も、これを一向に理解しない民衆も、決して匡正しないであろう。人間はこのように抽象概念によって身を処するものではない。人間

は、幸福であるように強制しなければ、幸福にできないものだ。だから人間に幸福を愛させるために、幸福を経験させなければならない。これが英雄の仕事であり、才能である。英雄はしばしば手に力をもって、人々の永遠の祝福をうけることができる。かれはまづ人々に法の軛をつけることを強制し、そしてついに道理の権威を感得させるのである。」

市民諸君、諸君は、かくも近似した性格描写によって、そこにブリュメール十八日の英雄（ボナパルト）を認めるであろう。それは秩序を回復するためにかくも必要であった革命、かくも賢明に企てられ、かくも慎重に完遂された革命、要するにルソーの願望に叶ったあの革命の英雄である。「ただ一人でも、とかれはいった。罪なき人の生命を奪うものであれば、わたしは自由を欲しないであろう。*」

* （原）*Considérations sur le Gouvernement de la Pologne.*

ルソーがこの「英雄の徳についての論」を書いたのは、コルシカ人のためであった。（四六ページの注参照）。あたかもボナパルトがかれらの間に生れ出るのを予感していたかのように。この英雄はあらゆる徳性を一身にあつめ、そしてかれの高い資質に劣らず貴重な謙譲の美徳をそれにつけ加えた。歴史はいうであろう。かれはみづからヨーロッパにあたえた平和*におけると同様、数々の勝利においても均しく偉大であった。かれは絶えず諸国の痛手を癒やすために努力し、そしてさまざまな困難な仕事によって、フランス人の福祉とかくも多くの他の諸国民の福祉を準備したのだと。

* （原）この平和はその後イギリス人によって条約を無視して破られた。

「ヒロイズムは、とルソーはつづける。それ故、精神のあらゆる資質の中で、一国民のために為政者が身につけることのもっとも肝要なものだ。それは数多の崇高な徳性の集合であって、これらの徳性はその結合において稀であり、その力においてより稀であり、またその構成するヒロイズムが一切の個人的利害を離れて、ひたすら他者の幸福を目的とし、他者の賞讃を代償とするだけに、さらに一層稀である。」

ルソーはまた同じ論文の中でわれわれにこういっている。

「もっとも適当な人々に徳性を分配しなければならぬとしたら、わたしは政治家に慎重を、市民に正義を、賢者に中庸を割当てるであろう。精神力ならば、わたしはこれを英雄にあたえるであろうが、英雄はこの配分を不満とする理由はないであろう。

実際、とルソーはいう。力はヒロイズムの真の基礎である。それはヒロイズムを構成する諸徳の源泉、あるいはその補充であって、これこそ英雄をして大事をなすに適当ならしめるものだ。思いのままに、とかれはいう。偉人を形

成するに役立つ資質をかきあつめ給え。もし諸君がそれに生命を吹込む力をあたえなければ、これらの資質はすべて衰え、ヒロイズムは消えうせるのだ。ところが精神力さえあれば、生来これに恵まれた人は必然的に数多の英雄的諸徳を獲得し、また他のすべての徳の埋め合わせができるのだ。」

ヒロイズム！　いかなるフランス人もこの言葉を発すれば、一つの感動的な記憶、価値のあらゆる観念をよびさます記憶、また祖国防衛の勇士たちの英雄的行為にたいする賞讃を命じる記憶をよび起さずにいられないであろう。かくもしばしば勝利の戦野において共和国の敵を粉砕した練達の将官ならびに大胆不敵な兵士諸君、また戦争の危険と同じく海洋の危険を冒して敵とたたかう勇敢な水兵諸君、ここに、諸君の勇気と真の名誉、すなわち祖国に奉仕する名誉に国民がささげるべき感謝のしるしに、われわれの感情の表現をつけ加えることを許し給え。

もしルソーがまだわれわれの間にいたならば、革命の罪悪を憎みながらも、フランス人の勇気と明智にたいしていかに喝采したであろう。この勇気と明智によって、フランス人は専制政治を打破し、その恥ずべき軛から圧迫された人民を解放し、もし可能であったならば、この哲学者の祈願とその深い思索の対象であった永遠平和の希望を回復したであろう。また同様にフランス人は自由諸国民の政体のモデルとしてふさわしい代議政治――共和主義の名に値する唯一の政体を創設したのだ。というのは貴族政治も君主政治と同じく共和政治ではないからだ。

かくも多くの光明を自己の世紀にもたらした哲学者は、その仕事の有益さによって、当然、政府の褒賞を要求することができたであろう。けれどもかれは決して王侯の恩恵を望まなかった。（フレデリック大王を除いては）。それどころか、かれはある場合には、こうした恩恵をさけるのに苦心した。あたかも貪欲な廷臣どもがこれを求めて汲々たるように。かれは自分が人類に貢献したことを知るだけで十分だったのだ。したがってかれの無欲恬淡はそれ自身一つのすぐれた美徳であって、その純粋性を十二分に知らない人々はこれを理解することができなかったほどだ。また若干の偉大な作家たちはその才能によってかれに比肩したが、かれはこの稀有な資性によってかれらすべてを凌駕した。この無欲恬淡は、あたかも利己主義が悪徳につながるように、善徳につながっていた。

「社会契約論」の作者はフランス元老院の中で発せられた次の言葉を、いかなる喜びをもって聞いたであろうか！

「国民公会は、最高存在にふさわしい礼拝は人間の義務の遂行であることを認める。

国民公会は、不誠実と暴政を憎み、暴君と裏切者を罰すること、貧者を助け、弱者を尊重し、被圧迫者を保護すること、可能なかぎりの善を他者になし、そして何人にも不正でないことを、人間の義務の第一位に置く。」

市民諸君、これらの原理は、今後、人間の義務と共和主義的モ

ラルの基礎となるであろう。これから外れる人々に禍あれ！かれらは公衆の侮蔑と屈辱と法の復讐をわが身にまねくであろう。

この同じ原理こそ、ルソーが人間を幸福にするために万人に鼓吹しようと欲したものであった。そしてかれは徳を教えたモラリストの中でも、訓戒と実例を一致させるという利点をわが身にもっていた。これは教育術においてあまりにも閑却された説得法である。「教訓が権威によって、また訓戒が実例によって支えられない所ではどこでも、とルソーはいう。教育は成果なく、善徳そのものも、それを実行しない人の口先で信用を失ってしまう。」

われわれはこの真理から結論することができる。キリスト教の職権を、生来これを果すに適していない人々に委ねたことほど、この宗教にとって有害なことはなかったと。そして新しい政教協約*は賢明にもその乱用を抑制する手段を講じたのだ。

* 一八〇一年七月十五日、ボナパルトが法王ピオ七世と結んだ協約。

ルソーは純粋な魂のよろこびを味わった。しかしかれは腐敗した世紀に生きて、これに憤激させられた。かれは風俗刷新の必要をつよく感じて、これに没頭した。そしてあえていうならば、……そうだ、ルソーは真理をいったためにファナティスムに追撃された偉大な人々に属していたのだ。かれは危険をものともせぬあの英雄的勇気をもって真理をいい、人類救済のために身を挺したのだ。果して、この哲学者は偏見と誤謬を攻撃しつつ、人類の権利を回復しようとしていたが、ファナティムはかれを人類から奪掠する機会をのみ狙っていたのだ。実際、誰でも人間に真理を教えようと欲するものは、迫害されることを覚悟しなければならない。そしてこのことはおそらくある賢者をしてこういわしめたものだ。ありとあらめる真理を手の中に握っていても、自分はそれを人間どもに見せるために手を開いたりしないであろうと。

教育についての著作は、かくも正当な讃辞に値したが、それはパリ高等法院が作者に逮捕令を発するために用いた口実となった。作者の友人たちは、かれを犠牲にしようとしていた暴虐からかれを奪い、迫り来る運命をまぬがれさせることを保証した。だがみづからその運命に身を委ねようとして、かれはこういった。「わたしは従容として事の起るのを待っていた。わたしはこの事件一切における自分の清廉潔白の上に身を安んじ、真理のために苦しむことの名誉へ招かれるのを無上の幸いと感じていた。」

しかしながら、かくも多くの有益な真理を含む書物も焚書の刑に処せられた。作者は、その焔のあかりでフランスを逃れることを余儀なくされ、足を祖国へ向けた。かれがあれほど愛し、かつその著作で多くの栄誉をあたえた祖国である。かれはそこに、感謝でなくとも、せめて慰めを見出すことを期待していたのだ。けれども、そこでは、ジュネーヴの元老院の中で、不正がかれを待ちうけ、かれにもっとも痛烈な打撃をあたえようとしていた。この元老院もまた、その後作者に像を建てさせたところの書物を断罪したのだ。当時の為政者は、疑いもなく、一切の正当な権威の淵源について諸国民を啓発していたこの天才人を恐れていたのである。

狂信者どもも、旧弊なパリ高等法院に劣らず、この哲学者の明識を恐れていた。パリ高等法院は、みづからその教団を廃止しようと欲していたジェズイットに対抗して、この哲学者に筆をとらせることができなかったことに復讐しようとしたのだ。この時、人々は、ルソーは雄弁家ではあったが、かれの筆が金銭目あてのものでないことを知った。

旧派のパリ大司教（ボーモン）もまた、社会の悪弊を非難しながらもつねに人間を尊重していたこの有徳の人にたいして、教書を発表した。司教は作者とその「教育論」を攻撃した。哲学者はあの注目すべき表題をもった書簡で応酬した。――

〃ジュネーヴ市民ジャン・ジャック・ルソーからパリ大司教、等々のクリストフ・ド・ボーモンへ〃*

* 原書の表題は――*Jean-Jacques Rousseau, citoyen de Genève, à Christophe de Beaumont, archevêque de Paris, duc de Saint-Cloud, pair de France, commandeur de l'ordre de Saint-Esprit, proviseur de Sorbonne, etc.*

高潔なジュネーヴ市民は、教化善導のためにのみ書かれたはずの著作において中傷されたことに当然憤激して、教書を反駁した。そして理性と雄弁の熱火をもって中傷を撃破した。ルソーはその返書を次の言葉で結んでいる。

「あなたは公然とわたしを侮辱されました。わたしはあなたがわたしを中傷されたことを今証明したのであります。もしあなたがわたしのように一私人であって、わたしがあなたを公正な法廷に呼び出し、そしてわたしたちが、わたしはわたしの書物をもち、あなたはあなたの教書をもって、そこに出頭したならば、あなたはたしかに有罪と認定され、侮辱がそうであったと同様に公然たる賠償をわたしにするよう宣告されるでありましょう。しかしあなたは正義であることを免除される地位を占めておられる。そしてこのわたしは数ならぬ身であります。しかしながら、福音書を説かれるあなた、もともと他の人々に自己の義務を教えるべき司教であられるあなた、そのあなたはかかる場合にあなたの義務を知っておられるでありましょう。わたしとしては、わたしの義務を果したのであります。わたしはもう何もあなたに申すことはありません。わたしは沈黙します。」

ルソーの栄光は敵どもによって暗雲におおわれたが、つねにそこから清らかに、誇らかにぬけ出た。かれは司祭たちの迫害やプロテスタン教会の圧迫や、またかれを欺くために友情の仮面をかぶった不実の友（ヒューム Hume）の裏切から身を護らなければならなかった。あまりに人を信じやすいルソーは、かれの友人と称する男によって、あの不信行為で有名な国民の中へ引きずりこまれたのだ。というのは、今日、フランスとの平和条約を侵犯したことでその政府の不誠実さはよく知られている。哲学者はイギリスで、約束された自由と安息を見出せると信じたのだった。だがそれは空しかった。この島でもまた嫉妬と中傷がかれの名誉を傷つけるために待ちうけていたのだ。かれは自分の清廉と率直

さをもってかれらに対向し、かれらのバケの皮をはいだ。かれはやがてパリへ帰って、友情の仮面をかぶった男よりもずっと信頼すべき友人たちに会った。友人たちは政府の保護の下にかれのフランス帰還の許可をとっていたのだ。そしてかれの不幸のきびしさをやわらげ、敵どもの迫害からかれを護り、悲惨なかれを慰めた。ルソーはフランスへ帰ってからは、植物学の研究とかれの生涯の記録である「コンフェッション」を書くことに専念した。かれはその中で無私公平に自分を描き、かれの心情と精神を赤裸々に露呈し、率直に自分の過失を告白し、自分の欠点も弱点も容赦しなかった。「かれがそこで懺悔するあやまちが屈辱的であればあるほど、その告白は一層りっぱである」とある賢明な作家*がいっている。

* *Bernardin de Saint-Pierre.*

市民諸君、ルソーの性格がいかなるものであったか、もしそれを知りたいならば、われわれはかれの言をきこう。かれはみづから自分を描写した。そしてかれの肖像は実物ありのままである。

「わたしは自分の探求において聰明というより熱烈であるが、とかれはいう。しかしたとえ自分の意に反しても万事に誠実であり、単純善良であるが、感じやすく弱気であり、しばしば悪をなすが、つねに善を愛する。友情によって結ばれるが、決して物質によって結ばれることなく、自分の利害よりも感情に執着し、人間どもからは何も求めず、かれらに依存しようとは決して欲しない。かれらの偏見にも意志にも譲歩せず、自分の意志を自分の理性と同じく自由に保っている。わたしは神を畏敬して地獄をおそれず、宗教を論じて無信仰にはしらず、背教もファナティスムも好まないが、自由思想家よりも不寛容者をはるかに憎む、云々。」

自然は時には偉大な人物に風変りな性格をうえつけたが、ルソーもその例外ではなかった。しかしまたこれ以上に明確な、高潔な、そして首尾一貫した、いかなる性格があろうか。これほど天才と精神の高貴と感受性と、そして特に比類なき誠実さに恵まれた人は滅多にない。いかなる哲学者もルソー以上に人民の尊敬に値したものはない。かれは終始人民の権利のもっとも熱烈な擁護者であった。しかしながら、スイスのヌーシャテル公領地のある村（モティエ）で、この偉人の生命に危害を加えるための道具に使われたのは、人民ではなくて、無智な民衆であり、また破廉恥な敵どもに煽動された狂信的な群衆であった。この地はルソーがフランスを去ってから、かれの迫害者にたいする避難所を求めにいった土地であった。

おお！　モティエの住民たちよ！　いつの日に、諸君の間によく理性が発達して、ルソーの名誉のために記念碑を建てさせるであろうか。その記念碑こそ、諸君の住む村でかれの身に加えられた危害のつぐないとなるであろう。

だが理性はつねにずっと後からやってきた。神性なものはまだごく少数の人にしか現われなかった、とある有名な人がいっている。

ルソーの「コンフェション」はかれの死後はじめて印刷されたが、その死はエルムノンヴィルで、友人の市民ジランダンの家でやってきた。この市民は友情と偉人の名誉のために、エルムノンヴィルの美しい庭園の中、その一部をなすポプラ島の上に記念碑を建てさせた。ルソーの遺骸が眠っていたのはこのさびしい隠れ家であるが、この時フランス人民はかれのためにパンテオン廟の扉を開いたのである。かれの墓の上には次のような碑銘が読まれた。——

Ici repose
L'Homme de la Nature
et de la Vérité.

Vitam impendere vero.
(C'était la devise du Philosophe.)
Hic jacent ossa J.-J. Rousseau.

〔ここに自然と真実の人眠る。——真理のために生命をささげる。(これは哲学者の座右銘であった。)ここにジャン・ジャック・ルソーの遺骨横たわる。〕

諸所方々から人々がこの記念碑を見るためにエルムノンヴィルへやって来た。そしてそれは宗教的な崇敬をもって眺められた。またそこにはジュネーヴ市民の茅屋もあって、その入口の上には次の言葉が書かれていた。——

〃自分の意志をおこなうために、他人の腕を借りる必要のない人こそ、真に自由である、……〃

ルソーの最後の言葉は最高存在への祈願であった。かれは死のずっと前にも、多くの人々が記憶にとどめている、あの有名な尊敬の言葉を神にささげた。——

「存在中の存在よ、御身あるが故にわたしは存在する。不断に御身を思念することは、わたしの根源に高まることだ。わたしの理性のもっとも名誉ある行使は、御身の前に理性を空しうすることだ。御身の偉大さに打ちひしがれる自分を感じることは、わたしの精神の歓喜であり、わたしの弱さの陶酔である。*」

* 「エミール」巻四(サヴォワ助祭の信仰告白)。

かつて、いかなる、より純粋な尊敬が神にささげられたであろうか! これは心情の敬意であり、精神のそれであり、またルソーが自己の創造主の前にみづから遜った沈思黙考の敬意である。かれは神の存在と同様に霊魂の不滅を信じていた。かれはヴォルテール宛のある書簡の中でこういっている。——

「形而上学のあらゆる精密な論議も、霊魂の不滅と慈悲ぶかい神の摂理について、一瞬たりともわたしに疑念を抱かせないでしょう。わたしは神の摂理を感じます。わたしはそれを信じ、それを欲し、それを希望します。わたしは最期の息をひきとるまでそれを擁護するでしょう。そしてそれ

がわたしの支持したあらゆる議論の中で、自分の利害の忘れられていない唯一の議論でありましょう。*」

* 一七五六年八月十八日附。いわゆる「神の摂理についての書簡」の結びの言葉。

ダランベールのように、かれも世の作家たちの迷妄を沈痛な思いで眺めていた。かれらは強力な悪から歯止めを取除き、不幸な徳から慰めを奪うために有害無益な努力をしたのである。

市民諸君、われわれは諸君に、まだジュネーヴで貴族階級が支配していた時代に、ルソーの像のために作られ、公表された銘文を紹介して、この講演を終ることにしよう。この銘文はわれわれが表現するよりもずっとよく、この崇高な哲学者の天才と諸徳を描いている。それにはこう書かれている。——

JEAN-JACQUES ROUSSEAU,
NÉ
CITOYENDE GENÊVE EN 1712.
DEPUIS,
PAR UNE NOBLE ABDICATION DE CE TITRE,
DEVENU COSMOPOLITE.
LE PLUS ÉLOQUENT, LE PLUS PARFAIT ÉCRIVAIN
DU MONDE CONNU, ANCIEN ET MODERNE.
PHILOSOPHE
PERSÉCUTÉ PAR LES FANATIQUES.
AMI
DE LA VÉRITÈ;
APÔTRE
DE LA VERTU;
AMANT
DE LA NATURE.
RESTAURATEUR
DES DROITS ET DES PLAISIRS DE L'ENFANCE.
RELIGIEUX
DANS LA SIMPLICITÉ DE L.ÉVANGILE ET DE SON COEUR.
PATIENT
DANS L'ADVERSITÉ.
ADMIRABLE
DANS LA PAUVRETÉ.
IMPLACABLE ENNEMI
DE L'OPPRESSION ET DE LA TYRANNIE.
RÈPUBLICAIN
COMME CATON:
CITOYEN
COMME ARISTIDE.
INGÈNIEUX
DANS LA CULTURE DES SCIENCES.
CRÈATEUR
DANS L'ART DE LA MUSIQUE.
D'UN CARACTÈRE DE PAIX;
D'UNE AME SENSIBLE ET ARDENTE.
ENFIN
PUR

D'AME, D' ESPRIT ET DE COEUR,
ET DIGNE
D'UNE MEILLEURE RACE D'HOMMES.
IL EST MORT
LE 2 JUILLET 1778

「ジャン・ジャック・ルソー。一七一二年ジュネーヴ市民として生る。その後、この資格を堂々放棄して、コスモポリートとなる。古代近代を通じて、もっとも雄弁な、もっとも完全な作家。狂信者により迫害された哲学者。真理の友、徳義の使徒、自然の熱愛者。幼少年の権利と愉楽の復興者。福音書と自己の心情の単純さにおいて信仰あつく、逆境にあって忍耐づよく、貧困にあって感嘆すべし、圧迫と暴虐の仮借なき敵。カトーのごとき共和主義者。アリスティデスのごとき市民。学問修養において聡慧。音楽芸術において創造者。平和的性格と敏感熱烈な魂の持主。最後に、魂と精神と心情において純粋にして、より良き人類の一員たるにふさわしい人。一七七八年七月二日歿。」

市民諸君、われわれは、もしこの不滅の人の霊にささげるべき尊敬の義務を果すことができたならば、幸いである。われわれの代表者の一人（ラカナル Lakanal）がいった。——

「この人こそ自由と道徳の友、擁護者、使徒であり、人間の権利の唱導者であり、また諸国民の福祉のために完遂されるであろう革命の雄弁な先駆者であった！ われわれはこの人において、かれが軽佻浮薄な冷笑にたいして敢然と擁護した有益な仕事と技術を讃えよう。都会の堕落と社交界の偽れる華美から遠く生活して、自然をよりよく知り、よく感じ、そしてそこへ同胞をより強力につれ戻そうとした孤独な田園の人を讃えよう。……なぜなら、天才と徳義は、たとえ人類を幸福にする手段に専念していても、人間どもの中傷迫害にさらされるもので、これは痛ましく、またおそらく避けがたいことであろう。そしてルソーは他の誰よりもこの天才と徳義の負債を支払ったのだ。……最後にわれわれは、国民の教化善導という高尚な技術においてわれわれの教師の中でももっとも雄弁であったこの天才人に敬意を表することによって、われわれ自身を讃えよう。そしてこれまた誤りなき次の予言を承認しよう。——

〃君がいつか真理を見ても、とかれは若い友人に書き送った。だからといってそれをいう時がきたわけではない。真理に有利な変遷を待たなければならない。その時こそ、今は秘しておかねばならないわたしの友人の名が、同じ名をもった人々、そしてその名によって課せられる義務を果すであろう人々に栄誉をあたえるであろう。* 〃」

* （原）Lakanal, Rapport sur J.-J. Rousseau, 29 fructidor, an 3.

市民諸君、諸君は今日こうした義務の中でももっとも神聖なもの――人類の恩人にたいする感謝の義務を果すためには、正義であれば十分だと信じた。

われわれはさらに、この講演を終るにあたって、ルソーが賛否両論をひきおこす諸問題を取扱い、そしてすべての人間のように時にはかれも誤ったということに注意しよう。それは人間たるものに免れがたい不幸である。だがかれの誤りは天才と有徳の人のそれであった。逆説的な思想の大部分において、かれは徳義の熱狂にとらわれた。そして数々の疑問を提起したが、後にはこれを厳正な批判にゆだねた。

この傑出した作家の作品をよんで、感嘆させられるのは、理性がかれにわれわれを照らす炬火を貸しあたえた時、雄弁がその本来の特質を発揮して、理性を美化し、われわれをしてこれを愛させることである。

かれは衣食にこと欠きながら、人間的で、慈愛にみちていた。かれは窮乏の生活をよく生きぬき、何事にも、なくてすませれば、みづから富者と心得ていた。かれの著作は永遠に、ものの考え方を教え、美徳の趣味を吹込み、そしてわれわれの胸の中に祖国愛の聖火をたもつのにもっとも適切な教訓の泉となるであろう。ルソーの名は真の共和主義者によって、感謝と尊敬の念なしには、決して口にされないであろう。かくしてこの名は未来の諸世代へ伝達されるのである。（完）

*

見られる通り、ビュマン述「ルソー讃」は革命時代・ナポレオン時代の特異な雰囲気をつたえるに十分である。スタイルもすこぶる調子の高い、熱烈な、迫力あふれるもので、いわゆる革命政壇の雄弁を想わせる。そしてもちろんルソー自身については最大級の礼讃に終始しているが、その中にもこの天才の人間と思想について、一つならず、正鵠をえた判断が見られる。その点、一個のルソー論としても注目に値するであろう。

フランス革命は相当長期にわたって幾多の段階をへ、さまざまな様相を呈した。そしてその間、人々の思想的、感情的振幅は大きかった。国権の最高機関について見ても、三部会、国民議会、立憲議会、立法議会、国民公会、――総裁政府、統領政府そしてナポレオン帝政へ。ルソーはこうした烈しい変転の全過程を通じて、時の英雄たちの守護神であった。革命は予言者、偶像を必要とする。ルソーはその要求をみたし、特にかれの「社会契約論」は革命の福音書、恐怖政治のバイブルであった。

権力の座を占めるものは次々に交替した。昨日の専制者は今日断頭台に消えねばならなかった。けれどもルソーは、あらゆる瞬間に、陽のあたる場所に置かれたのである。

一七九五年二月、マラーの遺骸はパンテオン廟から追放された。そしてかれの胸像はすべて打ちこわされ、下水道に投げこま

れたが、この時、劇場やカフェーでマラーのものに代って据えられたのはルソーの像であった。人々はその像を花で飾り、その前で香をたいた。「美徳が極悪にとって替った」のであった。

そして今やジャン・ジャックは、革命を予言したばかりか、半世紀も前に（「英雄の徳についての論」は一七五一年の作）、ボナパルトの出現を「予感」した天才であり、ナポレオンその人は「ルソーの願望に叶った革命の英雄」なのだ。こうしてジュネーブ市民の亡霊は、大国フランスの歴史的危機に際会して、相つぐ権力の各々を正当化し、つねに権衡を保たせる *Pondérateur* の役目を果した。そしてそこから革命の功績とともに、その罪科をも一身に背負わされる羽目になった。ルソーの信奉者たちの流した血が、かれの名誉にはね返ってきたのである。

もちろん、こうしたことはルソー自身の関知するところではない。自然と孤独を愛し、人間の自由と尊敬を主張してやまなかったルソーは、おそらく冥界で渋面をつくっていたであろう。一七九四年十月、ルソーの遺骸がパンテオンに祀られた、あの祭典には「社会契約論」の一書が恭々しく捧持されたが、その情景を報じた「共和通信」は、最後にこうつけ加えたものだ。——

「まだ血に染まった忌わしい服をまとまった不敵な連中がこの書物に近づくのを見て、哲学者の声がこう叫ぶのが聞えるように思われた。〃近よるな、けがらわしい！ この書物の中には、お前の断罪が宣告されていない行は一行もないのだ。そうだ。一人でも人間の生命を犠牲にした自由は、あまりに高く支払われたものだと書いた人が、パンテオンに納められた以上、もはや国民公会も血を流すことを許さないだろう。〃*」

* Edme Champion, *J.-J. Rousseau et la Révolution Française*, P. 178.

以来、ルソーの遺骸はパンテオンの中に眠っている。あの冷厳な石造建築の窖に、しかも論敵ヴォルテールと相対して、……果してこれがジャン・ジャックの霊を慰めるゆえんであろうか。——

ことし一九六二年はルソーの生誕二五〇周年にあたる。同時に「エミール」や「社会契約論」の出版二〇〇年の記念の年でもある。パリの「ルソー協会」では、この記念すべき年にあたって、ルソーの名誉を讃えるために多くの行事を企劃している。中でも主要なものはルソーの遺骸のエルムノンヴィルへの再移葬と全世界のルソー専門家を集めての「国際会議」*Colloque international* である。

ルソーがパンテオンに祀られたのは、あの革命の狂熱によるもので、決してルソー自身の意にそうものとは思われない。——

一七六五年九月、ルソーはモティエの村を石もて追われ、ビエンヌ湖心のサン・ピエール島に逃れたが、やがてここからも退去を命ぜられると、かれはこの〃ロマンティックな湖水〃と自然の風物を愛惜し、ここを最後の地ときめてこう願ったのであった。——

「わたしのためにこの避難所を永遠の牢獄にして、生涯わたしをそこに閉じこめてもらいたい。そしてそこから出る一切の力と希望をわたしから奪って、陸地とのあらゆる交通を遮断してもらいたい。そうすれば、わたしは世の中に起っていることを一切知らずに、世間の存在を忘れるであろうし、世人もまたわたしの存在を忘れてしまうであろう。*」

* 「夢想録」散歩五。

また一七七八年五月二十日、ルソーは最後の庇護者ジラルダン侯爵の厚意をうけて、パリからその領地エルムノンヴィルへ向ったが、途中、館に近い森までくると、かれは歓喜のあまり馬車から降りて、同行の医師*にいった。——

「いや、わたしはずいぶん長い間、煙や埃におおわれない樹を見ることができなかった！ これらの樹々は何と新鮮なことか！ どうか、できるだけ、それに近よらせて下さい。わたしはその一本をも見落したくないのです。」

そしてしばらく森の樹々を嘆賞しながら歩いた後、かれの姿をみつけて走りよった侯爵にとびついて、「ああ！ あなた、わたしの心はずっと前から終生ここに留まりたいとわたしに願わせていました」と叫んだのであった。

* Le Bègue de Presle (1735—1807) なお、このところは次の著参照—— J.-H. Volbertal, *Ermenonville, ses sites, ses curiostés, son histoire*, P. 16—17.

けれどもルソーの余命はいくばくもなかった。一七七八年七月二日、かれは卒中で仆れ、ジラルダンと妻テレーズの手を握りながら他界したが、その最期の言葉はこうであった。——

「親愛な妻よ、もう一度、草木の緑をみる喜びをもつために、どうか窓をあけて下さい。何と美しいことか！ この光は何と清朗なことか！ おお！ 自然は何と偉大なことか！ あの太陽を御覧なさい。その笑顔がわたしを呼んでいるようだ！……ああ、神だ。そうだ、神もわたしにその胸をひらき、わたしがあれほど願っていたあの永久不変の平安を楽しみに行くようわたしを招いている。*」

* この言葉はジラルダンによって庭園の石に刻まれた。またこの最期の情景はモロー・ル・ジューヌの版画でわれわれに親しい。

パリの「ルソー協会」では、〃自然への復帰〃 *Retour à la Nature* の名目で計劃している数々の記念事業の掉尾を飾るために、ルソーの遺骸をそのあるべきところ——自然の中へ返そうとしている。来る六月二十八日（生誕の日）、ルソーの柩はパンテオン廟から引出され、市民の礼拝に供されるであろう。そして七月四日（埋葬の日）を期して、一七九四年十月と同じコースを通り、同じく盛大な式典をもって、エルムノンヴィルの庭園の中のポプラ島に再埋葬されるであろう。こうしてフランスは、生前こ

の哲学者が霊感と慰安を見出した自然へそのなきがらを返し、名誉ある復権と一致をなし遂げるであろう。フランスは、人間精神の名において、実存の原理のもっとも偉大な鼓吹者をその終局的運命に返すであろう。そしてこの計劃については、ジュネーヴの「ルソー協会」も全面的に賛意を表し、「ルソーの場所は自然の中であって、パンテオンの冷たい廟堂の中ではない*」と強調している。

* パリの「ルソー協会」のパンフレット。

「国際会議」については、最近、ネモ氏からプログラムの原案を送られた。この会議はユネスコと提携して、来る六月二十八日から七月三日までロワイヨーモン（Royaumont）の僧院でおこなわれるが、今はその主要テーマを記すにとどめる。

一、ジャン・ジャック・ルソーと近代人
一、十九世紀および二十世紀における人間の条件
一、二十世紀における建設的展望
一、生命の諸次元にたいする教育法

最後に、ナポレオンの言葉を借りて結びとしよう。

「地上の安息のために、ルソーやわたしがかつて存在しなかった方がよかったかどうか、未来が知るであろう。*」

（昭和三十七年一月稿）

* この言葉は次のようにも伝えられている。――「地上の安息のためには、おそらくルソーやわたしがかつて存在しなかった方がよかったであろう。」―― Auguste Rey, *Jean-Jacques Rousseau dans la Vallée de Montmorency*, P. 261.

なお、ジュネーヴの「ルソー協会」はもちろん、スイスの観光局（O. N. S. T.）でも、ことし一九六二年を「ルソーの年」*Ann'e J.-J. Rousseau* として〝自然にかえろう〟*Retournons à la Nature* との名目で数多の記念行事を計画している。

後　記

本書は八折版全五十二ページ。本文のほかに短かい序言と末尾に附された「理性の福音書、または自然の法典抄」と題する断片があるが、省略した。また本文の注解もなるべく簡略にしたが、この種の文書のつねとして多くの未詳の箇所がある。

終りにパリ「ルソー協会」幹事マクシム・ネモ氏、ジュネーヴ「ルソー協会」書記アンヌ・マリ・プフィステル嬢および友人河崎俊二氏の厚意に心から感謝の意を表する。